

OCUACニュース No.34

大阪市立大学山岳会会報 発行 2002. 5. 22

知床流氷紀行

2002年1月の記録

尾形 達也

今年の計画も昨年と同じく知床半島、峠から岬までの縦走を計画した。今年は何としても成功させたい、昨年の雪辱を果たしたいという強い思いがあった。その思いが自分自身にプレッシャーをかけ、出発が近づくに連れ重苦しい気分になっていた。自ら計画してしまったあまりに大きすぎる山に、正直ビビっていた。

12月22日

前夜大阪発の予定が、阪和線の事故で関空発の最終便に間に合わず、早朝の便での出発となる。羽田で乗り換え女満別空港へ、送っておいだ食料と燃料を網走の郵便局で受け取り、JR、バスを乗り継ぎウトロの知床センターより入山。事故のおかげで3時間遅れの

スタートとなった。

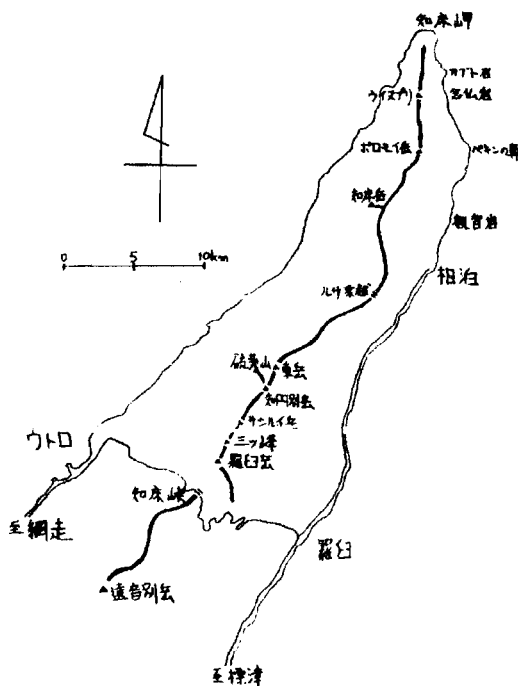
知床横断道路を1時間ほど歩きテントを張る。

12月23日

横断道路を知床峠まで上がり、さらに峠から羅臼岳目指して樹林帯を登る。南西側の斜面から取り付き、途中で南面にトラバースし森林限界近くで幕営。樹林帯の中はラッセルが深く、最後の1時間は空身でのラッセルであった。

ここでは磁北の西偏角が10度近くある。すっかり忘れて当初進路を左に取りすぎ、少し遠回りをする破目になった。

高度が上がってくると視界はほとんど無くなってきた。ここでのいつもの天気といった感じが。天気予報では明日から二日間の好天を予想している。



12月24日

今朝は空が明るい、しかし羅臼岳の頂上付近はガスの中である。空身のラッセルを1時間足らずで森林限界を超え、そこからは凍ったハイマツを踏んで、岩場の切れ目を目指して直上する。傾斜が強くなったところでストックをピッケルに持ち替える。風が強くと左の頬がヒリヒリする。天候は時間の経過とともに回復し、頂上を過ぎ羅臼平に下る頃には快晴無風状態となった。

この日は少し残業をし、知遠別岳近く尾根の東側の平坦地に幕営した。

12月25日

夜中から風が吹き出した。風向きがクルクル変わりテントはもみくちゃ。テント設営時は無風で天気の見通しも甘く見ていたので、ブロックの積み方もかなりいい加減だった。油断した。

幸いつぶされるほどの風ではなかったが、撤収には結構手間取った。

今日は視界がほとんど無く、風も強くてまっすぐ歩くにも苦勞する。知床らしくなってきた。しかし東岳さえ越えれば後は一気に高度を下げるので気分は楽だ。天候も急速に回復し、のんびり下る。

標高400mを切ったあたりで泊まる。

12月26日

快晴、気温も高い。今日は樹林帯のラッセルで終始する。このあたりは縦走中でもっとも高度の低いところである。

海岸線がすぐ近くに見え、自動車や漁船の音もよく聞こえる。ここからなら数時間で下界に出られるだろう。

昼から天気が崩れ、雪が降り出した。

12月27日

朝から風雪。この天気では知床岳を越えるのは不可能、手前の高度の低いところまでと考え、朝寝を楽しみ、出発を遅らす。

ところが予定地点に至る前に天候が回復、視界はともかく雪も風もなくなった。先にルートをやばすには、安全なサイトまでは時間的に不安がある。悩んでいるうちにガスが切れて正面に知床岳のまっ白な姿が現れた。招かれるようにして頂上に向かって歩き出す。行くしかない、ペースを上げる。

頂上に出たとたん目の前に流氷に覆われたオホーツク海の景色が広がり思わず叫んでしまうほどの感動を覚えた。

知床池のほとりで幕営。不注意でテントのポールを折ってしまった。

12月28日

今日も流氷のオホーツク海を見ながら歩く。昨日より、海面を覆う流氷が多くなっている。凍り付いたハイマツの上を、時々踏み抜くものの快適に歩く。この辺りは高さ3mを超えという「オバケハイマツ」が密生しているとのこと、無雪期にはハイマツの海を泳ぐよ



うにして進むらしい。

ウイヌプリの付近は、やたらと人臭かった。伐採され丸裸になっており、頂上には三角点の標識、登山靴の残骸。なんとも興ざめである。

今日は岬の灯台がみえるところまで進んだ。

12月29日

今日はブッシュがうっとおしい。昨日はハイマツを踏んで歩けたが、今日は雑木をかき分けて進む。なかなか距離が伸びない。このあたりは鹿の足跡だらけである。だがその姿は見えない。

岬一帯は広大な平原になっていた。高台上の灯台から岬を見下ろすと、今まで姿の見えなかった鹿がたくさんいる。すごい数だ、百頭くらいか？

岬は流氷で埋め尽くされており、さらに根室海峡にも帯状に入り込んでいる。

岬の最先端部分は岩稜状に海に突き出し、その最先端で、海を眺めつつしばらくたたずむ。よく見ると、隣の岩稜の方がここより少し先に出ているようだが、まあいいだろう。

この日は番屋の立ち並ぶ海岸を赤岩まで進み、テントを張る。

今まで儉約に努めていた燃料を贅沢に使いだす。ほとんどつけっぱなしだ。

12月30日

朝から曇が降っている。気温も波も高い。羅臼までの帰路はほぼ単調な海岸歩きであるが、海に突き出た岩場の高巻きやへつりがポイントである。今日は「カブト岩」の高巻きからだ。縦走中一度も使わなかったアイゼンをはく。

「念仏岩」の巻き道も厄介だった。残置のフィックスロープに頼って通過する。「ペキンの鼻」の巻き道は急な雪壁でそれ以上に悪かった。

しかし、このようなところにも鹿の足跡が多数ある。

次の岩場はへつる予定だったが、高波に洗われておりまったく手がつけられない。明日朝の干潮時に通過することにし、テントを張る。

12月31日

夜半から風が吹き荒れている。幕営場所は露岩の陰で安全に思えていたが、テントは激しくゆれる。海は沸き立っており、海岸線の通過はまったく不可能だ。沢を溯り、山の中を高巻きすることにした。

昨日越えたペキンの鼻に再び登り返すが、鼻の上の台地は強風で歩行不能、奥の樹林帯までの約100メートルを腹ばいになって進んだ。ここが今回の山行では最難関であった。高巻の途中で幕営するが、谷の中の樹林帯でもよろけるほど風が強い。ブロックを積み、屋根の無いガレージのようなサイトを構築した。

この日羅臼の町でも強風が吹き荒れ、電柱が倒れて数百世帯が停電したらしい。

1月1日

晴天、風は強いが歩行に支障はない。

今日も海岸線から離れて山の中を高巻く。ウナキベツ川の河口でようやく海岸線に戻る。



次の難所「観音岩」は小さく巻けた。巻道は雪壁になっていたが特に問題はなかった。後は海浜を歩くだけである。緊張感もまったく失せ、山側の斜面をうろつくエゾシカや、対岸の国後を眺めながらポテポテ歩く。山行の余韻にひたるにはちょうどいい。相泊からは、通りかかった地元の方にヒッチハイクさせてもらえた。羅臼の温泉旅館に一泊し、翌日バスで釧路に向かう。この日も快晴で、車窓から知床連峰が見渡せた。

目的の達成度からいえば完璧な登山であったが、小さな失敗、甘い判断等、反省すべき点も多かった。

予想外に天気がよく、ずいぶん楽をさせてもらった。2年前の正月に白馬の単独行に成功した時は、条件がよすぎたことに対し不満を書いたが、今回は憧れの地に到達した歓びを素直に感じる事ができた。

ランタンリルン登山報告

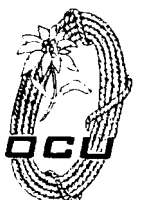
林 孝治

大阪市立大学山岳会の皆様にはいつもお世話になり、ありがとうございます。昨年の秋に、大阪市立大学隊によって初登頂されたランタンリルン峰（7234m）に行ってきましたので報告します。

99年～01年にかけて、ペルーアンデス、アコンカグア、デナリ（マッキンレー）などヒマラヤ以外の山が続いていたのでヒマラヤに復帰したいと思っていました。01年秋にランタン谷のヤラピーク（5530m）にヒマラヤ初心者を連れて行く計画があったのですが、「それだけじゃもったいない」という想いから急遽、ランタンリルン登山を計画したのが、7月末、出発の2ヶ月前のことでした。

当初からのヤラピークに6名、ランタンリルンの順応登山のナヤカンガ（5844m）までの参加者が2名、ランタンリルン本隊が8名の計16名という大部隊が出来上がりました。ヤラピーク、ナヤカンガ隊は54歳から67歳までの典型的な中高年ヒマラヤ登山隊ですが、それでもヤラピークには全員が、ナヤカンガにはビデオカメラマンの1名を除く全員が登頂しました。

ランタンリルン登山隊のほうは、プロガイドでブロードピーク縦走など8000m峰5座に登頂している北村俊之（38）、同じくプロガイドで2座に登頂、最近ではペルーアンデスに足しげく通っている平岡竜石（32）、それに副隊長の榊原義夫（47）とバリバリのヒマラヤニストの他、アコンカグアやデナリなど多くの6000mクラスに登頂し、7000mクラスの経験もある国枝宏子（61）と小西圭子（52）。ヒマラヤは2度目ながら、昨年、参加して登頂したバルンツェ（7129m）遠征のために福井市役所を辞めた竹内一志（38）。それに海外はキリマンジャロやモンブラン程度でヒマラヤは初めての今井昂司（62）。そして隊長の私というというメンバー構成です。



ネパール人スタッフは、ランタンリル本隊にクライミングシェルパ2名の他、コックやキッチンボーイなどのBCスタッフを雇用し、私達がヤラピークやナヤカンガの登山をしている間に、BCを建設し、さらにABC、C1yへとルートを延ばしてもらうという同時並行作戦としました。

サーダー（ネパール人スタッフのリーダー）兼クライミングシェルパのギャルツェン・シェルパは登山チョモランマ隊でチョモランマに登頂した他、日本隊でランタンリルの登頂経験もあるそうです。

もう一人のバサン・シェルパは日本隊は初めてですが、インド隊でカンチェンジュンガに参加した経験があるそうで、出遅れた登山隊にとっては良いシェルパが見つかったものだと喜んでいました。

ルートは、大阪市大一次隊、三次隊がルートにとったリルン氷河ルートは、氷河自体が大きく後退していて、取り付くのが困難な上、やはりロシアンルーレット的な要素が大きいため、二次隊がルートに採った南東稜ルートを採用することにしました。大阪市大隊の初登頂以降、15～6登ほどされているようですが、南西稜からの一隊を除いてほとんどが南東稜からのものです。

ネパールでは、昨年6月に前国王暗殺事件が発生し、それに抗議した市民の街頭抗議運動が暴動に発展してカトマンズは一時混乱しました。

そして、一方では以前よりマオバディ（ネパール共産党毛沢東派）が地方の警察署や政府関係の施設を襲撃し、多くの警察官などが殺害されて、警察官が逃げ出してしまっ、ネパール政府の統治が及ばないという地域もありました。

そこに同時多発テロが追い討ちをかけたので、今年は観光客やトレッカーが大幅に減少。秋季の登山隊も20数隊という少なさです。観光立国ネパールにとっては大きな打撃となりました。

8月～9月にかけて、ネパール政府とマオバディとの対話が進み、一時、雪解けムードかと期待したのですが、交渉は決裂。マオバディは武力闘争を再開し、カトマンズやその近郊でもテロが発生、ネパール政府は、11月に非常事態宣言を発令し、マオバディの討伐に軍隊を投入・・・と、急激に事態が進展しています。

私達の出発は同時多発テロの2週間ほど後で、アメリカのアフガン侵攻も予想される状況でしたが、キャンセルする人もなく、またカトマンズ路線はどれも満席に近い状態でした。

9月29日、一日遅れでネパールに到着する北村を除く15名がカトマンズに集結し、ヤラピーク、ナヤカンガ隊ネパール人スタッフとともにランタン谷に向けて出発しました。ランタンリル隊のネパール人スタッフと隊荷は翌日の出発です。

ランタン谷は今ではトレッキングの代表ルートの一つですからドンチェ、さらにその先のシャブルベンシまで車で入れ、シャブルベンシがキャラバンのスタート地点です。

ドンチェの少し手前の所は例年、モンスーン明けは土砂崩れが起こって、車が通れなくなり、今年も車を捨てて徒歩で通過し、向こう側に残されたバスに乗り換えて先に進みました。また、そこから少し先には軍隊の検問所があってヘビーチェックがあります。ここから先はチベット国境に近い所ですし、以前、反乱を起こしたカンバ族（ダライラマの護衛



兵)が移住させられたことから、ご法度の武器類が探索されるほかに、撮影料の外貨獲得目的でビデオ類を探しているようですが、日本人には友好的で、チェックも甘くなります。シャブルベンシからはランタン谷を辿り、ラマホテルで一泊、次の日の夕方、ランタン村に着きました。

ランタン村は今では全戸に電灯が灯るようになったそうで、新しいロッジも増え、さらに建設中のものがたくさんありました。大阪市大一次隊の遭難碑は銅板の端が少し浮いていましたが、前回訪れた時とそんなに変わっていませんでした。

キャラバン3日目の午前中には最後のロッジがあるキャンジンゴンパに到着。ランタン谷のアプローチは雲量が多く、イマイチ展望は得られず、時折雨が降って、まだモンスーンが明けていない様子でした。

キャンジンゴンパを拠点にして、キムシュン氷河の末端付近(4200m)まで、さらにツェルゴ・リ(4800m)と高度順応を進め、第一の目標、ヤラピークには全員が登頂しました。この日から天候が良くなってきて、モンスーン明けを思わせました。

キャンジンゴンパに戻ったメンバーのうちヤラピーク隊6名は、ヘリであつという間にカトマンズに戻り、帰国の途につき、残りのメンバーは続いてナヤカンガに登ります。

ランタン谷左岸、すなわちランタン谷を挟んでランタンリルンの対岸、ガンジャラの隣にあるのがナヤカンガで、いわゆるトレッキングピークの一つです。

ナヤカンガ峰では二波に分かれて登山活動を行い、一次隊(北村、平岡)は通常のルートよりの登頂でしたが、例年より雪が少なく、落石が頻発するガラガラのところを登り登頂しました。

10月9日、二次隊は落石の危険を避けて、急峻な雪の続いたルンゼをルートにとりました。ルンゼを登りきって、尾根に出て、しばらく尾根上を行き、急な雪壁を登ると頂上です。頂上からは東にシシャパンマ、西にマナスルを遠望でき、「マナスルは、今日は絶好の登頂日だなあ」と話し合っていたのですが、この日労山マナスル隊の一次隊が登頂したのをあとになって知りました。

ハイキャンプで一泊したあと、麓のキャンジンゴンパ(3800m)に戻った12日は、午前中から荒れ模様となり、ランタン谷を挟む山々は瞬時に白くなりました。

私たちはナヤカンガのタイミングの良い登頂を喜んでいたのですが、その時にマナスルで労山隊の悲劇が起こっていたのです。労山マナスル隊の二次アタック隊が1名死亡、近藤隊長ほか1名が上部に取り残されるという事故が発生していました。私たちはそれを知る由もありませんでしたが、それを知ったならば直ちに救援に駆けつけたことでしょう。

その後、ランタンリルンのBCに移動、本格的なランタンリルン登山が始まりました。BCは大阪市大隊と同じ場所で、BC横の小高いところには大阪市大一次隊の遭難碑がありました。

当初、藤本さんから、森本隊長、大島隊員、ギャルツェン・ノルブの名前を刻んだ石版がBCに転がっているようなので、下山する際にはランタン村に降ろしてくれと頼まれていたのですが、ランタンリルンを望む小高いところにしっかりしたケルンが建てられ、そこに組み込むような形で石版がはめ込まれているので、それを取り出すにはケルンを壊さねばなりません。私はこここそが三人が眠るにはふさわしい場所と思い、勝手ながら、そのま



まにしておきました。

そのケルンのところに祭壇を設け、隊員のための安全祈願のプジャを行い、早速、登山活動の開始です（ネパール人スタッフのためのプジャは既にヤラピークの前に、隊長が参加して行っていましたので、私にとっては2度目のプジャになりました）。

BC (4200m)からは、南東稜側面の草付き斜面をゆっくり登ってABC（アドバンスベースキャンプ=4800m）まで1時間半。そこで装備を整え、南東稜の細い取り付けルンゼに向かいます。大岩がごろごろするエンドモレーン上を約1時間で氷河に入ります。大きく深いクレバスに1箇所かかっている今にも崩れそうなスノーブリッジを渡って5Pほど登ると幅10mにも満たず、両側が切り立った岩壁に挟まれた細いルンゼが始まります。そこを10Pほど登ると大きなチョックストーンがあり、南東稜のコルに至ります。

すでにクライミングシェルパによってここまでルートが作られていました。

南東稜のコルからは南東稜上にルートを取るのですが、両側ともスッパリと切れ落ちておりテントを張るスペースがありません。当初、チョックストーンのところのわずかなスペースに2人用テントを張ってC1を建設したのですが、3分の1ほどが空中に出ているありさまで、カラスにテントを破られたこともあって、もう少し上になんとかスペースを確保して小型テント2張りでC1を作りました。

BCを朝8時から9時頃に出発すると、そのときには雲ひとつ無かった空もこのあたりに来る頃には南東稜を越えてやってきた雲が頭上に広がり、雪が降り出します。降雪量はそれほどたいしたことがなくても、漏斗状のルンゼに集中し、見る見る間にルンゼ内に滝のように雪が流れ、傾斜の落ちたところには大量に積もって、深いラッセルとFixロープの掘り起こしが必要になります。

C1から上はもろい岩稜、雪稜と岩壁が交互にあらわれ、なおかつその間に懸垂で下降するギャップがあって、不順な天候も重なり、なかなかルートが伸びず、BCで停滞する日が続きました。

今井隊員は、昔はバリバリ登っておられたようですが、ブランクが長く、ランタンリルンは手に負えないことがわかってきましたので、この間に登山活動を断念し、カトマンズに戻り、アンナプルナ方面にトレッキングに行くことになりました。

また、当初、良いシェルパが見つかったと喜んでいたのですが、サーダー（シェルパ頭）は酒好き、博打好きで、ある時BCからキャンジンゴンパに「タバコと電池を買いに行ってくる。翌日には（村から）ダイレクトでC1に上がり、戦列に復帰する」とのことでOKしたものの、私たちが上部で活動を再開しても約束を違えて村に留まったままで戻ってこないという背信行為がありました。村の飲み屋？の女性に無線機で我々の行動を探らせたり、「すぐに戻って来い。戻ってこないと、くびにするぞ」という警告に「既にBCまで戻っている」と嘘をついたり、でたらめな口実をしたりして傷口を広げたので、結局、彼を解雇しました。そのため戦力が低下したことは否めませんが、不愉快な想いをせずに登山活動ができるようになったことはプラスであったと思います。あの時期まで経歴がある有能なシェルパが残っていることに疑問を持たないことは私達の実力者かもしれないかもしれませんが、責任を感じたエージェント（コスモトレック）は後日、シェルパの装備費の半額を返してくれま



した。

BCに滞在し、たまたま日本の短波放送を聞いている時に、群馬岳連の3人がダウラギリ東壁で行方不明になっていることを知りました。

次の日、病気で娘が亡くなったとの連絡を受けてカトマンズに戻っていたキッチンボーイがBCに復帰しました。彼は労山マナスル隊の事故の知らせを持ってきて、初めてマナスル隊の事故を知りました。近藤隊長はじめ隊員のほとんどと一緒に登山した仲間です。事故発生から既に10日以上が経過し、亡くなった隊員以外は既にカトマンズ、あるいは日本に戻っているとのことでしたが、昨日キャッチしたダウラギリの事故もあって、カトマンズはごった返しているだろう、何か手助けが必要ではないかと思い私と国枝、小西隊員は登山活動を中止してカトマンズに戻りました。結局、カトマンズではあらかた処理が済んでいて、いずれもの隊のエージェントであるコスモトレックのオフィスはひっそりしていました。カトマンズに戻った私達は、モチベーションが下がってしまい、再びBCに戻ることはありませんでした。

ランタンリルンのほうは榊原副隊長を中心に登山活動が続けられ、天候の合間を縫って氷冠の下に初めて現れた平坦な場所であるプラトーにC2(6200m)を建設しました。当初の予定では6500mから6700mくらいにC3を設ける予定でしたが、登山期間のタイムリミットも迫ってきたので、C2から長駆アタックすることにしました。

BCで休養した後、榊原、北村、平岡がアタックのためC2に入りました(竹内は既にこの時点で、登頂を断念していました)。同日、C2から氷冠下までルート工作を終え、氷冠を突破するルートも確認して翌日のアタックに備えました。ところが、アタックの朝には今までにない大雪が降り、北村と榊原は1回目のアタックを中止してBCに戻りました。

平岡は帰国日が迫っていたので、これが最後のチャンスです。もう1日C2に留まって、翌日単身でアタックを試みるつもりです。翌日、平岡はC2を出発しましたが、やはり雪の状況が悪くなく、結局アタックを断念。平岡のランタンリルン登山は終わりました。

榊原と北村はキャンジンゴンパに下りて休養。ちょうどこの時、榊原の支援トレッキング隊がキャンジンゴンパに上がってきていて交流したのですが、「どうも、この時風邪をうつされたようだ」とは本人の弁。

BCに戻った二人はラストチャンスとなる2回目のアタックのためにC2に入りました。しかし、まず北村が体調すぐれずに断念。榊原も体調が良くないので断念。結局6300m付近を最高到達点にしてランタンリルンの登山活動は終わりました。

ランタンリルンには何時の日か捲土重来を期したいものですが、あの困難な山に執念を持って取り組まれて勝ち取られた大阪市大山岳会の初登頂は誠に敬服に値するものだと感じました。



ペルーインカ文明」を尋ねて

2001/12/23-2002/1/2

佐々木惣四郎

12月23日バンクーバーに住む WIFE と共に、安くする為にコンチネンタル航空を使いバンクーバーをたち、ヒューストン経由ペルーのリマに24日夜到着して旅がはじまった。空港は、3年前山登りでワラスに行った時と比して民間運営になっており、きれいで明るくなっておりスムーズな入国ができた。ホテルは、ミラフローレンス地域にあり、後刻海岸べりが大開発されている事が解り、食事を楽しむ事ができた。

今回の旅の主範囲であるリマからクスコは、南緯12度から15度に属し、アジアで言えばジャワ島のさらに南に属し、気候的にはアンデス山岳地帯（シェラ気候）となる。インカ文明についてほとんど無知の状態での旅であったので、今回の収穫は、インカ文明がもっと古いものと思っていたが、1532年スペインのフランシスコ・ピサロに亡ぼされるまでの約400年間の独特の文明である事が解ったことであった。また注意すべき事は、高度が高く、高度への順化が必要で、行動日程に工夫がいる。

12月25日 リマよりクスコ（高度3360m）へ

リマから約1000KM離れたクスコについて午後、3時間の観光ツアーにでかけ市内の「太陽の神殿」、郊外のサクサイワマン、タンボマチャイ、プカラプカラ、ケンコー等のインカ文明・石の遺跡をみてまわった。この日始めて、インカ文明の石組みの素晴らしさに接した。「カミソリの刃一枚すら通さない。」という評判であるが実際見ないと実感難しいと思う。遺跡は石ばかりという感じであっけなかった。

クスコの町は、世界遺産に指定されており、インカの礎石にたつ教会や邸宅で、ほとんど全てスペイン以後に建てられたものである。薄茶色の屋根で全面的におおわれ、一見した感じではとても整然としている。静かなたたずまいであり、人々の暮らしも貧しいながらもことなくユッタリとしていた。スペイン以前のいわゆるインカ文明というものは遺跡以外極めて少なく、敢えていえば昔のインカの道ぐらいとの事であった。

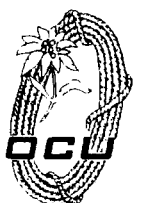
夜はフォルクロア（歌と踊り）の店で食事を楽しんだ。

12月26日 マチュピチュ（高度2280m）見学

クスコより往復8時間弱かかった。空中都市として有名なマチュピチュは、1911年ハイラム・ビンガムにより発見され、400年の眠りから覚めたものであるが、素晴らしいの一言にすぎる。天体の動きがすでに構築物に具現されていた。

汽車で向かうのであるが、ウルバンバ川にそってインカ時代の幹線道路といわれたビルカバンバの山道が続いており、インカ古道といわれトレッキングコースとして残っている。マチュピチュは、汽車の終点よりバスにのり400mの高度を登るのであるが余りの山奥に度肝を抜かれた。

日本人ガイドを専用につけていたので、一つ一つの遺跡につき根ほり葉掘り様々な説明を受けることが出来て楽しかった。インカの世界にのめりこんだ一日であった。



12月27日　クスコよりプーノ（高度3850m）へ

この日はクスコよりプーノにゆく汽車がゆかない日であったので、車をチャーターしてガイドと共にプーノへ入った。4000-5000mの山が連なり、さらに広い田畑が続き6時間のドライブであった。途中4300mの峠や温泉があり、アルパカも多く見られユッタリとしたハイキング気分の移動であった。道路は、デコボコがなくよく整備されていた。プーノにはチチカカ湖があるのである。

畑が延々とつらなり高さを全く感じさせない風景である。

12月28日　チチカカ湖（高度3812m）ウロス島訪問

どことなく神秘的な雰囲気漂わせるチチカカ湖は、琵琶湖の12倍で余りに巨大すぎて実感を得るにはいたらなかった。ウロス島は、この湖にトトと呼ばれる葦でつくられた「浮き島」である。現地のインディオが実際にこの浮かぶ島で生活しており、一生暮らすのであるが、こんな所で生活ができるのは不思議な感じがした。歩いてみるとやはりフアフアして水に浮いている事が実感できた。

島よりの帰りプーノの市内観光をしたが道路上の屋台では、インディオが多くみうけられた。店では非常に多くの野菜が売られておりやはり高さを感じさせない。

12月29日　プーノよりアレキパ（高度2329m）

アレキパに向かう途中、シュスタニ遺跡に寄ったが、石塔の墓であり、わずかにインカの名残が感じられる程度であった。ただ、ここからのウマヨ湖の眺めは素晴らしいものであった。

ペルー第二の都市であるアレキパでは高度がようやく通常になり、これまで頭痛に悩んでいたWIFEがアルコールを飲めるようになった。ここには日本人観光客は、ほとんどこないとの事であったが、独立峰であるミステイ山（6091m）、チャチャニ山（6075m）の山がすぐ近くにあるという事でワザワザ出かけてきたのであるが、空港からクッキリとこの2山が見えて満足であった。山には、ガイドもつき山登りも出来るとの事。

12月30日　アレキパ見学—リマへ

時間不足で郊外にゆけずサンタカタリナ修道院をはじめ、教会巡りをした。数字によればペルーの95%がカトリック教徒といわれ、ここにも教会は実に多くあり、訪ねた教会ではどこも土地の人が熱心にお参りにきていた。クスコ、プーノと共に、都市自体がローマカトリック教会を中心とする都市形態であり、生活形態でもある。

12月31日　リマ観光

専用のベテラン日本人がガイドにつき一日アテンドしてくれた。クリストバル丘より、天野博物館へ行き、紀元1000年頃に栄えたプレ・インカ（インカ文明以前）のチャチャイ文化につき、日本語説明を2時間弱聞いた。よくその時は解ったが、今は感じしか覚えていない。

また国立人類学考古博物館ではプレ・インカよりインカまでのものが所狭しと並べられ



ており、日本人ガイドの説明がついてくれ面白く、興味をそそるものであった。

最後に

1月1日再度 リマ市内をブラブラしたあと、夜半ヒューストンに行き、NASA を見学の後、バンクーバーに1月2日帰宅して旅は終了した。

テロの影響で日本人観光客は大きく減少しており、なんだかユックリした旅の様に感じたがインカ文明については正式な記録がない為、ほとんどは後刻、歴史家、学者による推測の文化の側面が強いという事である。

観光の見どころはクスコとマチュピチュであり、ここにあと2日程ユックリすべきであった。

編集後記

長年会報編集に携わってきた矢倉さんが編集長を引退されました。
ご苦勞様でした。代わって私が暫定的に編集を行うこととなりました。

何分、センス・丁寧・敏速という言葉には縁のなかった編集長ですから
みなさまから苦言をいただくことは覚悟しております。

引継第1号は、レイアウトの余裕もなく、無骨なものとなりましたが、
その分、中身はとてもすばらしいものでありますので助かっております。

(Y 生)

